（第２号様式）

神奈川県教育委員会教育長　殿

令和６年４月 26 日

県立伊勢原高等学校（定時制）

令和５年度　学校評価報告書（目標設定・実施結果）

	視点	4年間の目標（令和2年度策定）	1年間の目標	取組の内容		校内評価（実施結果）		学校関係者評価（3 月 18 日実施）	総合評価（3 月 31 日実施）	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
1	教育課程 学習指導	・生徒の自主的な学びを育む教育課程を編成し、定時制の特徴を活かし、少人数で生徒一人ひとりに対するきめ細かな指導を実践する。 ・グローバル社会で対応できるよう、ICT 等を活用し、基礎学力の定着を図り、興味関心のあることに対して深く探究できる力を養う。	○多様な生徒のニーズに対応し、基礎学力の定着を図るとともに、発展的な学習支援を実践する。 ○組織的な授業改善を推進するためのWGを組織し、主体的・対話的な学びの力を育成するとともに、ICT に関するリテラシの醸成を図る。	・生徒の習熟度に対応するため、TTや取出し授業を実施し日本語を母語としない生徒や学び直しに対応する。また、学びが不十分な生徒に対した補習や進学のため更に進んだ内容を学習する講習を実施するとともに、模擬試験を通して学力の確認等を行う。 ・WGを中心に教員が授業の互観をする機会を設けてＩＣＴ活用を視野に入れた生徒が主体的に学ぶための方策を研究していく。	・生徒による授業評価の数値を確認し、生徒の実態やニーズに対応できたか。また、学力向上のため、補習・講習や模擬試験に参加する生徒数が増加したか。 ・授業評価や研究授業等において生徒の学力向上のための場面設定等、取組みに対する評価が上がったか。	・「生徒による授業評価」を実施し、1 回目の調査では、各項目の「かなり当てはまる」「ほぼ当てはまる」の割合がすべての項目で昨年度1回目の調査結果以上となった。また、2回目についても、1回目の授業評価をもとに課題点の改善を図ったところ、学年後半に行くにしたがって内容が難しくなる中で、1回目以上の結果を得た項目もあった。 ・補習に参加する生徒数に増加がみられ、発展的な内容を取り扱う講習に参加する生徒も増加した。 ・WG を中心として「一人一台端末を活用する授業」を意識し、アプリケーションの紹介や活用事例について教員研修をおこなってきた。校内授業公開を 6 月に実施し、10 月には授業相互観察をおこなった。場面に応じ、一人一台端末の利用が授業の中に取り組まれる様子が多くの科目で見られた。	・引き続き、TT や取出し授業を行い、学び直しが必要な生徒や日本語を母語としない生徒など多彩な生徒のニーズに対応する。 ・生徒による授業評価でポイントとなった“授業中に生徒同士の意見の共有や議論する機会”を設けるとともに、生徒が新たな知識技能を得ることができるような授業展開を工夫する。 ・引き続き来年度も授業互観期間や授業研究を通して ICT 活用の事例を共有し、それぞれの授業での活用を目指す。	・市内小中学校では、市から児童生徒にタブレットが貸与されており、毎日 ICT を活用した活動をしているため情報機器に慣れている生徒も多いので、生徒にとって ICT の活用は身近になっている。高校での活用にも多くの成果が見込まれる。ICT 活用により授業参加が容易になる工夫をすることは、授業に参加する意欲があるものの、表立って発言することが苦手な生徒にとって効果的な配慮となっており、今後も成果が期待される。	・今後、日本語を母語としない生徒や学び直しの必要な生徒が増加することが考えられ、多様な生徒への対応がより必要となる。TT での対応、効果的な個別指導など、授業等で効果的な授業形態を工夫しているが、引き続き継続する必要がある。 ・魅力的な授業となるよう、個々の教員が現在行っている方策を共有し、さらに発展させることが望ましい。 ・ICT の活用方法について、現在の成果を活かし、発展させられるよう工夫していくことが求められる。	・個々の生徒の困り感に対応できるよう、補習や個別指導の授業等の対応を継続し、生徒にとって充実した学習活動を構築する。 ・引き続き職員同士の授業相互観察を続け、効果的な事例を共有して、各授業が生徒にとって魅力的なものとなるよう、職員同士で協力しながら研究を重ねる。 ・ICT の活用方法について、今後も機会をとらえて外部からも情報を収集し、生徒がみずから参加する授業、一人ひとりに内在している意欲を具現化できる授業の実現のため、方策を研究していく。
2	（幼児・児童・） 生徒指導・支援	・共生教育の実現を目指し、高い人権意識を醸成する。 ・組織的な支援体制を構築し、外部機関との連携を図り、心身ともに健全な学校生活が送れるよう支援する。 ・家庭と連携を図り、基本的な生活習慣の確立を図るとともに成人年齢の引き下げに伴い、高校時代に成人としての自覚・責任が持てるよう自立を支援する。	○生徒が互いに多様性を認め、共生社会に向けた思いやり教育を実践する。 ○中学校からの支援の引き継ぎや職員間の情報共有を確実に行う。また生徒の特性を理解し的確に対応するために、保護者や外部機関と継続的に連携し支援体制を整える。 ○卒業後、社会人として自立できるよう、基本的な生活習慣の確立を目指すとともに、責任感や自律心を養う。	・違いを個性と認める共生社会の在り方を職員が研鑽し、授業や学校行事等で実践する。 ・ニーズに合わせて外部機関との連携を継続的に行い、生徒に対する支援策を全体で共有する。また、ケース会議を継続的に実施し生徒の変化に対応した支援を行う。 ・三者面談や、家庭連絡を通して保護者との協力体制を強化し、生徒が自己管理する力や基本的生活習慣を身に付けられるよう促す。	・職員向けの研修会から得られる知識や実例をもとに、授業や学校行事等で実践できたか。 ・支援が必要な生徒に対して、外部連携や校内連携を通して効果的な支援を実践できたか。 ・生活習慣を整える意識が高まったか。また、年間で、遅刻、欠席の回数が規定数を超えた生徒数が令和4年度を下回ったか。	・人権研修講座を実施し、性的マイノリティーの問題に悩む生徒への適切な対応や配慮すべきことについて学んだ。また、身体測定や体育的行事での配慮や授業等での言葉の選び方などについて協議した。 ・1年生を対象に SC、SSW による全員面談を実施し、個々の生徒に対する支援内容を検討した。また伊勢原支援学校による巡回相談を2回実施し、支援内容について協議した。 ・集会等を活用し、生活習慣や食習慣の重要性について触れ、生徒の意識向上に努めた。また、三者面談や保護者への連絡を密に行った。	・体育的行事の種目の工夫や身体測定時の個別対応など、ジェンダーに配慮し対応を進めることができた。今後も、どの生徒にとっても安心できる環境づくりについて、さらに検討していく。 ・引き続きSC、SSWと協力して個々の生徒支援を行うとともに、定期的な外部連携を継続する。 ・令和5年度は、令和4年度と比較して、欠席者数が減少している。引き続き、基本的生活習慣が身につくよう支援を行う。	・個々の生徒が、高校生活を通して各自の生活を整える力を身につけられるよう支援をして、卒業させることが高校の持つミッションの一つである。本年度、欠席者の減少や学校行事に主体的に参加する生徒が多くなってきたことを土台に、生徒が卒業するまで、必要となる支援を継続していくことが期待される。	・生徒の多様性に意識を向け、個々への配慮を考える体制づくりが必要となる。現段階でもジェンダーに配慮した対応が必要となるケースを何件か把握しており、職員間で情報交換をしながら対応をしている。今後もさらにアンテナを伸ばし、ジェンダーに配慮した対応、生徒個々の特性に対する対応を進める必要がある。そのためにも、引き続きSC、SSWとの連絡を密に取り、また必要に応じて外部の協力を仰ぎながら、生徒の支援をしていく。	・引き続きSC、SSWと協力して個々の生徒支援を行うとともに、必要な外部連携を継続する。それらを通して、生徒の成長を促進させる環境を整える。 ・令和6年度も、令和5年度に引き続き基本的生活習慣が身につくよう支援を行い、主体的に、学習活動をはじめとした学校活動に参加する姿勢を身につけられるようにする。

	視点	4年間の目標 （令和2年度策定）	1年間の目標	取組の内容		校内評価（実施結果）		学校関係者評価 （3 月 18 日実施）	総合評価（3 月 31 日実施）	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・ 改善方策等		成果と課題	改善方策等
3	進路指導・支援	・生徒のニーズの変化に伴い、一人ひとりの進路実現に対応できる幅広いキャリア教育を実践する。定時制改革において進路実現が大きなテーマである。 ・自分の将来に対して、自ら向き合い、主体的に準備できるよう様々な経験を積む機会を支援する。	○社会に出る準備段階として卒業までに身に着けるべき能力や態度を育成する。 ○学校行事や部活動等を通して自主的に考え、行動する力を育成する。	・外部機関や教科学習を通して生徒が自分の個性を引き出す能力や態度を育成する。 ・学校行事や部活動等において生徒の個性を活かした立ち位置を探し、自分を活かせるよう促していく。	・外部機関や教科学習において得られた情報を適切に活用し、生徒個々人の進路指導に活かせたか。 ・学校行事や部活動において生徒の参加状況が前年度より改善したか。	・全日制との連携を図りながらハローワークのガイダンスを実施し、就職に対する意識向上が図られた。 ・新入生歓迎会や文化祭は生徒自らが企画することで、取り組む意欲が向上し参加率も向上した。部活動も試合や文化祭の発表など目的意識を持って参加する生徒が増加した。	・ハローワークだけではなく、ほかの機関とも連携し、生徒の進路に対する意識の向上を図っていく。 ・生徒の人数が少なくなる中で、各行事において、一人ひとりの生徒に負担はあるが、それぞれの生徒が達成感を得られる経験ができるようにする。	・職員個々の、生徒に応じた進路意識向上を図る工夫がなされている。 ・文化祭に生徒たちが楽しそうに参加している姿が見られた。また体育祭では種目の選定など企画段階からから生徒の意見を採り入れ、生徒主体の行事になっている。	・個々の状況に合わせ、外部機関との連携等を通して必要な進路指導をすることができた。その一方で、将来の目標がなかなか見つからない生徒もおり、時間をかけて意識向上を図る必要がある。 ・生徒が学校行事に主体的に参加するようになってきているので、その意欲をさらに伸ばしていけるよう、魅力ある行事を作り上げていくことが必要である。	・生徒一人ひとりが、進路実現の過程においてどの段階にあるのが、を面談や研修の振り返りなどを通して把握し、各自が自分と向き合い目標を実現するためにステップを踏めるよう、個々へのきめ細かな指導を重ねる。 ・生徒が自分たちで行事等の活動を作り上げることへの喜びを実感できるよう、生徒の発想を引き出し、実現を支援しながら、魅力を感じられる活動となることを目指す。
4	地域等との協働	・社会的な自立を促すために「地域の教育力」を活用し、交流・活動する場面を増やす。 ・定時制の活動を知ってもらうために HP での広報活動や学校説明会の実施など積極的に外部への発信を推進する。	○地域活動への積極的な参加、地域住民との連携を促し、地域の一翼を担う機会を増やす。 ○魅力的な学校作りを目指しつつ、それらの活動を外部へPRできる機会を増やす。	・学校運営協議委員やPTA等の意見を参考にしながら、地域清掃等活動可能な地域活動への参加を促す。 ・HP の内容を充実させるとともに定期的更新を行い、学校活動や行事の様子を外部に発信、学校の魅力をアピールする。	・地域活動や地域の方々との協働を体験することで、地域社会の一員としての自覚を持つことができたか。 ・活動や行事毎に HP を更新し、学校説明会等において、本校の特色を PR することができたか。	・地域貢献活動を実施し、地域社会の一員であるという自覚を深めることや地域の環境について考える機会とした。 ・行事毎に HP の更新を行った。また文化祭では入試相談会場を設け学校紹介を行うとともに、会場内や会場前の廊下のスペースを利用して、生徒の作品や学習内容を掲示し本校の特色を PR した。	・生徒一人ひとりが地域社会の一員であるという自覚を深めることや地域の環境について考えることができた。 ・HP の更新を定期的に行うことで、日ごろの教育活動を広報することができた。また、生徒の作品等を掲示することで、広報活動に効果的であっただけでなく、生徒たちの自信にもつながっている。	・定時制も地域連携が取れる活動ができるよう働きかけたい。社会の一員であることを認識するよい機会となる。 ・HP での発信内容は、本校関係者はもとより、外部の方が本校を知るための大事なツールとなっている。発信により生徒が自信をもつことにつながったのがよかった。	・地域貢献活動を通して、住民の方々が力を尽くして地域の環境を維持発展させていることを生徒は実感している。地域に意識を向ける手立てとしても、地域貢献活動は有益となった。 ・HP の更新回数が多くなることにより、本校の情報発信が進んでいる。	・今後も地域貢献活動を継続し、自ら社会への視野を広げていくきっかけとなるよう意識付けをし、成果があげられることを目指す。 ・HP は年次更新だけでなく、その内容も併せて精査しながら、地域や関係者に向けた本校の教育活動の広報に努める。
5	学校管理 学校運営	・教職員の教育公務員としての意識向上を図り、事故・不祥事の防止を徹底する。組織的なチェック体制の確立を図る。 ・近隣自治体と連携・協働を図り、生徒が主体的に防災教育に取り組むと共に、防災に対する知識を高め、意識の醸成を図る。	○事故・不祥事防止の啓発活動の機会を増やし、事故・不祥事防止に努める。 ○近隣自治体と連携・協働し、地域の防災について学び、防災意識を高める。	・定期的に事故・不祥事防止研修会を行うとともに、様々な場面を想定した研修を行い不祥事事故防止に対する意識を高め相互チェック体制を強化する。 ・近隣自治体・地域と連携活動があった際に振り返りを行い活動の記録を残す。災害時に的確に行動できるよう、自治会の協力のもと DIG 訓練を行う。	・事故・不祥事防止研修会や人権研修等に当事者意識を持って参加し事故を未然に防ぐことができたか。 ・近隣自治体・地域との活動において、迅速な連携が取れ、適切な防災活動ができたか。また、自治会との DIG 防災訓練を通して、教職員や生徒の役割を確認できたか。	・毎月職員会議後に不祥事防止研修を実施し、チェックリストによって事故不祥事防止に対する意識を高めるとともに、より深い知識を得ることができた。 ・8 月末にシェイクアウト訓練を実施した。 ・11月に伊勢原消防署職員による防災避難訓練（非常灯のみを使用した避難および耐煙体験）を実施した。 ・伊勢原市が作成した防災マップを使用した防災図上訓練を3月下旬に行う。	・引き続き、不祥事防止研修等を定期的に実施し職員同士で相互にチェックをすることによって、事故不祥事防止につなげていく。 ・シェイクアウト訓練に、生徒は実直に取り組んだ。 ・11月に実施した伊勢原消防署職員による防災避難訓練で、夜間ならではの危険性を生徒に体験させることができた。また、危険からの回避の仕方について生徒に考えさせることができた。	・職員の意識を高揚させ、今後も不祥事未然防止を徹底できるよう努めてほしい。 ・DIG 訓練を通して学校周辺の危険箇所を確認し、生徒が安全を確保するための知識を得ることができるのは有益である。また夜間定時制の実際に即した工夫のある避難訓練は、生徒の安全に結びつくものとなった。	・現状に満足せず、不祥事の防止に向け継続して意識高揚を図ることが必要である。 ・シェイクアウト訓練、防災避難訓練などに生徒が積極的に取り組み、有意義な活動ができた。 ・DIG 訓練では、グループワークを通して生徒同士で安全について考えることができた。 ・本年度は地域自治体と協働した DIG 訓練等は実施できなかった。	・不祥事防止のための研鑽を定期的に実施し、全職員で絶えず意識ができるよう、また意識が高揚するように、研修を継続して実施していく。 ・地域自治体との DIG 訓練の共同実施を検討する。また、それをきっかけとして地域自治体との連携を模索していく。 ・消防署の助言、協力を仰ぎながら、より効果的な防災避難訓練となるよう、内容を検討する。